

臨床研修歯科医のための研修習熟度の評価に関する研究

角, 義久

<https://doi.org/10.15017/1544043>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（歯学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名	角 義久			
論 文 名	臨床研修歯科医のための研修習熟度の評価に関する研究			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	吉浦 一紀
	副 査	九州大学	教授	高橋 一郎
	副 査	九州大学	教授	中村 誠司

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、研修歯科医の自己評価訓練と指導歯科医の形成的評価を目的として、アウトカム基盤型の形成的評価システムを構築し、研修習熟度測定のためのアンケート調査および研修習熟度の推移の分析を行ったものである。

第 1 章記載の研究では、研修習熟度測定のためのアンケート調査が行われた。調査票は、研修歯科医と指導医との討議を経て、基本的分野、予防歯科、歯内治療、歯周治療、歯冠修復、義歯補綴および口腔外科の 7 つの診療分野を網羅した 50 項目の研修目標が設定された。認知領域は 7 項目、情意領域は 10 項目、精神運動領域は 33 項目に相当した。作成した調査票を用いて、平成 23 年度の研修歯科医 20 名の研修習熟度の測定を、研修中間期（9 月）と修了時期（翌年 3 月）に研修歯科医自身と担当指導歯科医による双方評価により実施した。その結果、基本的分野、歯内治療、歯冠修復、口腔外科の 4 分野で研修歯科医自己評価と指導歯科医評価の双方で習熟度が向上していた。歯周治療分野と義歯補綴分野では、研修歯科医と指導歯科医の評価に差が認められた。

第 2 章記載の研究では、調査票に基づき、研修習熟度の推移について検討が行われた。各目標の自己評価と指導歯科医評価を集計し、両評価の「一致」、「過小評価」、「過大評価」の割合を算出して検討した。その結果、研修歯科医の研修習熟度に対する自己評価能力はその診療内容に影響を受けることが明らかとなった。専門性が高く経験頻度が低い項目では「過小評価」が増える傾向があり、逆に侵襲性がなく経験頻度の高い項目では「過大評価」が増える傾向があった。研修進行に伴い、全体では「一致」の割合が増加し、「過大評価」は減少しており、研修歯科医の自己評価能力が全体的に向上していることが示唆された。

本研究によって、研修歯科医と指導歯科医が研修目標の習熟度をそれぞれ定期的に測定することが可能な形成的評価システムが構築されており、本システムは研修歯科医が自己主導的な学習者に成長していくための優れた支援システムとなっていることが明らかとなった。よって本論文は博士（歯学）の学位授与に値する。